

研究ノート

# ゲーテのスピノザ論

——資料を中心に——

ツグラッゲン・エヴェリン

目次

はじめに

序章 ゲーテの三つのスピノザ研究時期

第1章 スピノザについての第一の研究時期 (1773年 - 1774年)  
—「プロメートイス」

第2章 スピノザについての第二の研究時期 (1784年 - 1785年)  
第1節 「神性」

第2節 ゲーテの「スピノザ研究」

第3章 スピノザについての第三の研究時期 (1811年 - 1812年)  
—ゲーテのスピノザに関する発言—『詩と真実』より

おわりに

参考文献

はじめに

本研究ノートは、ゲーテがスピノザの思想から受けた影響に関する資料を集め、多少のコメントを付したものである。既に翻訳があったものはそのまま引用したが、筆者の責任で訳し直した箇所もある。古い訳の場合、または訳がない場合は筆者が訳した。その場合は原文(ドイツ語)も載せた。

長い人生にあって、ゲーテは様々な人物から影響を受けた。1816年11月

7日にワイマールで書かれたカール・フリードリヒ・ツェルターあての手紙の中で、自分が大きな影響を受けた三人の人物を取り上げた。「この頃私はまたリンネを読んで、この非凡な人間に驚かされました。私が彼から学んだものはじつに無限と言うべきで、植物学のことにはとどまりません。シェイクスピアとスピノザを別とすれば、個人のなかでこれほど大きな影響を受けた人を私は知りません。」<sup>1</sup>

他に尊敬した人物も何人かいたと考えられる。エッカーマンは次のように述べている。「(1827年4月11日)ゲーテに、近代の哲学者のうち、誰がもっともすぐれていると思うか、と尋ねてみた。『カントが』と彼はいった、『最もすぐれている、間違いなくね。彼はまたその学説の影響が今日にいたるまでやまないことを証明され、現代ドイツ文化の一番奥深く滲透した人なのだからね。(省略)』」<sup>2</sup>

ゲーテはカントが最もすぐれている哲学者だと思っていた。ゲーテに大きな影響を与えた人物は他に「詩と真実」の第三部第十四章の中に取り上げられている。彼に決定的に働きかけた人物について次のように述べている。

これほど決定的に私に働きかけ、私の考え方の全体にあれほど大きな影響をあたえたこの人物は、スピノザであった。つまり私は自分の特異な本性を陶冶する手段をあらゆるところに探し求めて得られなかったその果てに、とうとうこの人の『エチカ』にめぐり合ったのである。<sup>3</sup>

ゲーテはスピノザから決定的に働きかけられたのである。既に若いころからスピノザの影響を受けてきた。森鷗外は「哲学」という随筆の冒頭で、ゲーテと哲学との関係について次のように述べている。

ギョオテ<sup>4</sup>はスピノザ (Spinoza) 派の一人である。併しスピノザの書を読まぬ前から同一思想を持っていた。20歳の時書いたものにかう云つてある。「我等は只自然に由って神を知る。神は唯一の存在者なるが故に、

一切有は必然神の本体に属する」と云ってある。当時ギョオテはピエール・ベエル（Pierre Bayle）<sup>5</sup>の歴史及批評辞典（Dictionnaire historique et critique）でスピノザの記事を見たばかりで、その記事には反対していたのだから、此詞は自然の思想である。1773年の夏になって、ギョオテはスピノザの書を読んで、生涯スピノザ派を離れなかった。晩年に自分の大影響を受けた人を数えた時も、リンネ（Linné）とシェイクスピア（Shakespeare）と二人に並べて、スピノザを挙げた。

スピノザと一致しているギョオテの根本思想が三つある。世界及一切有が唯一で、神的で、そして必然だと云うのである。<sup>6</sup>

森鷗外によるとゲーテはスピノザ派の一人であり、若いころからスピノザの影響を受け、生涯スピノザ派を離れなかったのである。ゲーテは彼がスピノザから受けた影響を晩年でも述べている。

ゲーテのスピノザに対する考えの多くは『詩と真実』の記述、そして書簡から見受けられる。ゲーテは当時の知人への書簡を通して、スピノザの思想について頻繁に議論していた。本研究ノートでは書簡の中で行われた議論も詳しく調べていきたい。書簡を通して当時のゲーテの考え方と心情が良く分かるだろう。

以下、本研究ノートでは、ゲーテがスピノザについて言及している資料をできるだけ時間軸に沿って取り上げていく。故に、本研究の各章もゲーテの作品が書かれた順番で紹介する（但し、スピノザに関しての書簡は分量も多いので、本稿ではとりあげず別稿とする）。

## 序章 ゲーテの三つのスピノザ研究時期

ハンブルク版ゲーテ全集の第13巻の注釈に、ゲーテがどんな時期にスピノザを研究したのかが書かれている。

“Es gibt in Goethes Leben drei Epochen besonderer Beschäftigung mit Spinoza.“<sup>7</sup>

「ゲーテは一生涯に三つの時期にスピノザ研究に専念した。」<sup>8</sup>

注釈に書かれている三つの時期は1773年から1812年にわたる。三つのスピノザ研究時期は次の通りである。

第一の研究時期は1773年から1774年までの時期である。1773年の夏になって、ゲーテはスピノザの書を読んで、一生涯にわたってその思想から影響を受けた。これは「プロメトイス」という詩が書かれた時期にも相当する。ただし、ハンブルク版には書かれていないが、1773年以前、1770年にゲーテはスピノザの名前を初めて取り上げた。すなわち1770年1月－3月の“Goethes Ephemerides”<sup>9</sup>（「ゲーテのエフェメリデス」）の中である。このことからゲーテは1773年以前に既にスピノザを読んでいたことが考えられる。

第二期は1784年～1785年まで、ワイマールで『エチカ』を詳しく読み、研究が深化した時期である。常に一人で読んだのではなく、その時期にはよくシュタイン夫人と一緒に勉強し、彼女の他に色々な知人とこのテーマについて手紙での意見交換もしていた。同じ時期に、当時まだタイトルがなかった随筆「スピノザ研究」をシュタイン夫人に口述筆記させて、「神性」という詩を書いた。

第三期はスピノザを改めて読んだ1811年から1812年までである。ハンブルク版によると、ゲーテは1811年に改めてスピノザの研究を行い（日記Tagebuch, Annalen）、1812年に『詩と真実』の第三部の第十四章においてスピノザについて記載している。ハンブルク版には書かれていないが、Reclam版の*Dichtung und Wahrheit*の後書きによると、1814年に『詩と真実』の第一部から第三部が出版され、その中の第三部の第十四章と第十五章にスピノザの記載がある。また1831年には、ようやく『詩と真実』の第四部が出版され、その中の第十六章にスピノザについての記載がある。このことから第

三期はハンプルク版による 1812 年よりも長期にわたっていたと考えられる。

ゲーテのスピノザに対する考えの多くは『詩と真実』の記述、そして書簡に見受けられる。ゲーテは当時の知人と書簡を通して、スピノザの思想について頻繁に議論していた。ワルネッケ・フリドリッヒの“*Goethe, Spinoza und Jacobi*” (『ゲーテ、スピノザとヤコービ』)<sup>10</sup>の中に、ゲーテの書簡の中でスピノザの名前がどれくらい上げられたかを示した統計があり、それによるともっとも頻繁にスピノザについて議論した時期は 1782 年から 1786 年までであった。

## 第 1 章 スピノザについての第一の研究時期 (1773 年? - 1774 年) — 「プロメートイス」

本章ではゲーテが第一のスピノザについての研究時期(1773 年? - 1774 年)に書かれた「プロメートイス」を紹介する。

この詩は同じタイトルをつけた断片「プロメートイス」と同じ時期に制作された。詩の制作した日には明確には知られていないが、断片と同じ日であるとすれば 1773 年 10 月 12 日である。詩は以下のようである。

### 「プロメートイス」

なんじの空をおおえ、ゼウスよ、  
雲霧をもって。  
またあざみの頭をむしる  
少年のごとくに、  
かしの木や山の頂になんじの力を振るえ！  
されどわが大地に  
なんじの触るるを許さず、

なんじの建てしにあらざるわが小屋、  
またわがかまど、  
その火を、なんじねためども、  
みなこれわがものぞ。

太陽の下、なんじら神々より  
あわれなるものを我は知らず。  
なんじらはささげものや  
祈りの息吹によって  
なんじらの威厳を  
細々と養うにあらずや。  
幼な児や乞食のごとき  
はかなき望みを抱く痴者なくば、  
なんじらは飢えはてしならん。

われ幼なかりしころ、  
せんすべも知らずして、  
惑えるまなざしを太陽に向けぬ、  
そこにこそ、わが嘆きを聞く  
耳やあらんかと、  
悩めるものをあわれむ心や  
わが心にも似て、あらんかと。

おごれる巨人族に対し、  
たれかわれを助けしぞ？  
死と屈従とより  
たれかわれを救いしぞ？  
きよく燃ゆるわが心よ、

すべてなんじ自ら果たせる業ならずや？  
しかも、なんじは若くお人よくも、  
欺かれつつ、救いの感謝を  
天上にて惰眠をむさぼる者に熱烈に述べしか。

なんじを崇めよというか。何の故に？  
なんじはかつて、重荷を負えるものの  
苦痛をやわらげしことありや？  
なんじはかつて、悩めるものの  
涙をしずめしことありや？  
われを男子に鍛えしものは、  
わが主にしてなんじの主なる  
全能の時と、  
久遠の運命ならずや？

はなやかなる夢の  
みのらざりしものあればとて、  
わが生を憎みて  
荒野にのがれよと、  
なんじはさかしらに言うや？

われはここに坐し、人間をつくる、  
わが姿に似せて、  
われに等しき一族をつくる。  
われに等しく苦しみ泣き  
楽しみまた喜ぶ一族を——  
またわれに等しく  
なんじを崇めざる一族を！<sup>11</sup>

出典によって「プロメトイス」の日本語表記が異なる。もう一つの書き方は「プロメテウス」であるが、プロメトイスの方がドイツ語の発音に近いので、本研究ノートではプロメテウスが使われる引用文以外ではプロメトイスを用いることにした。

ゲーテのプロメトイスのモチーフは、スピノザと密接に関連しあっている。この詩が書かれたゲーテのスピノザについての第一の研究時期（1773年－1774年）はドイツ文学史上で言えば、シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤 1765年－1785年）である。ゲーテのスピノザについての第二の研究時期（1784年－1785年）もシュトゥルム・ウント・ドラングに当たる。

ゲーテは、この時期に古代神話の英雄や古代及び近代の天才と呼ばれた偉人たちを創作の対象にしている。この文学運動の時期は天才時代（"Geniezeit"）と呼ばれている。巨人とは古代神話の巨人たちにならって命名された天才的な人物である。若いゲーテにとって、スピノザもその一人であった。なかでもゲーテにとってプロメトイスの存在は芸術の創造性ともあいまって、最も興味のあるテーマの一つであった。天才時代はゲーテが古代神話の英雄のような天才になろうとした文学活動の時期である。

ゲーテは1814年に出版された『詩と真実』の第三部第十五章の中で「プロメトイス」という詩について、以下のように、40年あまりの間にドイツ文学史で様々な出来事があったことを振り返っている。

プロメテウスの寓話は、私の心のなかで生き生きとした姿となってきた。昔の巨人の服装を私は自分の身の丈けに従って裁断し、それ以上よく考えたりしないで作品を書きはじめた。ここにはプロメテウスが自分の手で人間を創造し、ミネルヴァの好意で人間に生命を吹き込み、第三の王朝を築いたことによって、ゼウスや新しい神々と抗争におちいる葛藤が描かれている。たしかに現在の支配者である神々は、巨人と人間とのあいだに割りこんだ存在だという不当な見方をされているといえるか



ら、不平をならすのも当然なのである。この珍しい構図の一部として独自の形で書かれた例の詩は、ドイツ文学史上有名なものとなった。というのは、この詩が機縁となって、レッシングが思考と感情の重要な点に関して、ヤコービに反対の立場を明らかにしたからである。この詩はある爆発の導火線の役割を果たし、これがもとで品位あるひとびとの極秘の諸関係が暴露され、ひとびとに噂の種が提供されることになった。このような諸関係は、その他の点ではきわめて高度に啓蒙された社会にあって、当事者の彼らには意識されずに眠っていたのである。この爆発の威力は猛烈なもので、このために私たちは、たまたま偶然の事件が発生したこともあって、もっともりっぱな人物の一人であるメンデルスゾーンを失ったのである。<sup>12</sup>

「プロメーテイス」という詩は神に逆らう巨人主義を格調高く謳っている。プロメーテイス自身は地上の主として、天上の主たる神と対立している。

「爆発の導火線」という言葉は汎神論論争を意味している。「プロメテウス」という詩は当時、汎神論論争のきっかけとなったと言われる。汎神論論争とは、18世紀後半にドイツで起きたスピノザの哲学をどう受け入れるかという一連の論争のことをさす。ゆえにこれをスピノザ論争ともいう。この論争にはゲートをはじめ、レッシング、モーゼス・メンデルスゾーン、ヤコービ、カント、ヘルダーなどといった当時ドイツを代表する学者（哲学者、文学者、劇作家など）が参加したのである。

## 第2章 スピノザについての第二の研究時期 (1784年—1785年)

本章ではゲートのスピノザについての第二の研究時期に制作された「神性」と「スピノザ研究」を紹介する。この詩と随筆が書かれたゲートのスピノザについての第二の研究時期は Geniezeit と呼ばれ、上に述べたようにシュ

(106)

トゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤 1765年－1785年）という文学運動の時期にあったのである。

## 第1節 「神性」

「神性」はゲーテのスピノザ論の代表的な詩の一つである。初めて掲載されたのは1783年11月、『ティーフルター ジャーナル (*Tiefurter Journal*)』という雑誌の中であった。その後、1785年にヤコービの『スピノザの教説について (*Über die Lehre des Spinoza, in Briefen an Mendelssohn*)』の第一版の中で掲載されたことがある。*Goethe Handbuch*によると初めて「神性」というタイトルで掲載されたのは1789年であった。

掲載された時期はハンプルク版ゲーテ全集の第13巻の注釈にいうゲーテの第二のスピノザ研究時期（1784年－1785年）と一致していないので、第二期はもう少し早く始まったと考えられる。

この詩の掲載の背景には、ヤコービがゲーテの承諾なしでこの著作の中に最初にゲーテの名を取り上げながら「人間は気高くあれ」（「神性」の最初の行がタイトルとして使われた）を載せて、そして著者の名に触れずに「プロメトイス」を載せたという事実がある。ヤコービが許可なしでゲーテの詩、特に「プロメトイス」を出版したという出来事は、後に二人の間の喧嘩の一つの原因になった。

### 「神性」

人間は気高くあれ、  
情けぶかくやさしくあれ！  
そのことだけが、  
我らの知っている  
一切のものと

人間とを区別する。

我ら知らずして  
ただほのかに感ずる  
より高きものに幸あれ！  
人間はそのより高きものに似よ  
人間の実際の振舞いが  
それを信じさせるようであれ。

自然は  
無感覚だ。  
太陽は  
善をも悪をも照らし、  
月と星は  
罪人にもこの上ない善人にも  
同様に光り輝く。

風と溢るる流れと  
雷鳴とあられとは  
ざわめきつつ進み、  
だれ彼となく捕らえては、  
急ぎ通り過ぎる。

同じように運命も  
人々の中に探りの手を入れ、  
少年のけがれない  
巻き毛を捕らえるかと思えば、  
罪を犯せる

はげ頭をも捕らえる。

永劫不変の  
大法則に従い、  
我らはみな  
我らの生存の  
環をまっとうしなければならぬ。

ただ人間だけが  
不可能なことをなし得る。  
人間は区別し  
選びかつ裁く。  
人間は瞬間を  
永遠なものにすることができる。

人間だけが、  
善人に報い、  
悪人を罰し  
癒し救うことができる。  
またすべての惑いさまよえる者を、  
結びつけ役立たせる。

我らはあがめる  
不滅なものたちを。  
彼らも人間であって  
最上の人間が小さい形で  
なし、あるいは欲することを  
大きな形でなすかのように。

気高い人間よ、  
 情けぶかくやさしくあれ！  
 うまずたゆまず  
 益あるもの正きものをつくれ。  
 そしてかのほのかに感ぜられた  
 より高きもののひな型ともなれ！<sup>13</sup>

詩のタイトルによると神についての詩だと思われるが、実は詩の本当のテーマは人間とその倫理的振舞についてである。このような倫理的振舞は神性を通して実現すべき、あるいは神性に概念的な内容を与えるべきである。詩の中では人間が倫理的可能性を発揮せよと訴えられる。

## 第2節 ゲーテの「スピノザ研究」

原本はシュタイン夫人の手書きであり、ゲーテが1784～1785年の冬にかけてシュタイン夫人と共にスピノザの『エチカ』を読んだ時期に彼女に口述筆記させたものである。元来タイトルがついていなかった口述筆記は当時出版されなかった。その後、エッカーマンが原本を訂正したため、出版の予定があったことが想定されるが、実際には原本は出版されなかった。ハンブルク版ゲーテ全集の注によると“Studie nach Spinoza”（「スピノザ研究」）というタイトルが初めて使われたのは“*Goethes Werke*”（ワイマール版ゲーテ全集の第2巻）の第2版の中である。

和訳はゲーテ全集第25巻<sup>14</sup>の中で「哲学的習作」というタイトルで1940年に改造社から出版された。その後の和訳は見当たらない。改造社版の松山武夫訳の「哲学的習作」では古い表現が使われていたため、筆者が訳し直した。ドイツ語の原本はハンブルク版の“Studie nach Spinoza”<sup>15</sup>（「スピノザ研究」）とする。

スピノザ研究 („Studie nach Spinoza“)

Der Begriff vom Dasein und der Vollkommenheit ist ein und ebenderselbe; wenn wir diesen Begriff so weit verfolgen als es uns möglich ist, so sagen wir, daß wir uns das Unendliche denken.

Das Unendliche aber oder die vollständige Existenz kann von uns nicht gedacht werden.

Wir können nur Dinge denken, die entweder beschränkt sind oder die sich unsre Seele beschränkt. Wir haben also insofern einen Begriff vom Unendlichen, als wir uns denken können, daß es eine vollständige Existenz gebe, welche außer der Fassungskraft eines beschränkten Geistes sind.<sup>16</sup>

存在 (das Dasein) と完全性 (die Vollkommenheit) の概念は一つであり、まったく同じものである。この概念を可能なかぎり探究していく時に、我々は無限なもの (das Unendliche) を想像すると言う。

しかし無限なもの、あるいは完全な存在 (vollständige Existenz) を我々は考えることはできない。

我々はただ有限なものか、我々の魂自身が制限するものだけを考え得るのである。つまり我々が無限なものという概念をもつのは、それがあ  
る有限な精神の理解力の外側にあるところの、ある完全な存在であって  
ほしいと我々が考えることができるかぎりにおいてである。<sup>17</sup>

Man kann nicht sagen, daß das Unendliche Teile habe.

Alle beschränkte Existenzen sind im Unendlichen, sind aber keine Teile des Unendlichen, sie nehmen vielmehr teil an der Unendlichkeit.

Wir können uns nicht denken, daß etwas Beschränktes durch sich selbst existiere, und doch existiert alles wirklich durch sich selbst, obgleich die Zustände so verkettet sind, daß einer aus dem andern sich entwickeln muß und es also scheint, daß ein Ding vom andern hervorgebracht werde, welches aber nicht ist, sondern ein lebendiges Wesen gibt dem andern Anlaß, zu sein, und nötigt es, in einem bestimmten Zustand zu existieren.

Jedes existierende Ding hat also sein Dasein in sich, und so auch die Übereinstimmung, nach der es existiert.<sup>18</sup>

無限なものが部分をもつということとはできない。あらゆる有限な存在は無限なものうちにあるが、しかし無限なものいかなる部分でもなく、むしろ無限なものに關与するのである。

なにか有限なものが自らによって存在するとは考えられないが、しかしあらゆるものは自らによって存在する。事情は連鎖的に続くので、一つのもは他のものから生じなければならず、一つの事物は他の一つからもたらされるように思われるのだが、そうではない。ある生命的存在が他のものに、存在することのきっかけを与え、あるきまった状態で存在することを勧めるのである。

要するに、実在しているすべてのものは、自身の存在を自己の中にもち、そうしてまたそれにしたがって存在するところの調和をもっている。<sup>19</sup>

Das Messen eines Dings ist eine grobe Handlung, die auf lebendige Körper nicht anders als höchst unvollkommen angewendet werden kann.

Ein lebendig existierendes Ding kann durch nichts gemessen werden, was außer ihm ist, sondern wenn es ja geschehen sollte, müßte es den Maßstab selbst dazu hergeben, dieser aber ist höchst geistig und kann durch die Sinne nicht gefunden werden; schon beim Zirkel läßt sich das Maß des Diameters nicht auf die Peripherie anwenden. So hat man den Menschen mechanisch messen wollen, die Maler haben den Kopf als den vornehmsten Teil zu der Einheit des Maßes genommen, es läßt sich aber doch dasselbe nicht ohne sehr kleine und unaussprechliche Brüche auf die übrigen Glieder anwenden.<sup>20</sup>

ある事物を計測するということは雑な行いであり、生ける物体に対してもっとも不完全に適用されうるのでしかない。

生ける存在物は外部のいかなるものによっても計られることはできない。もしどうしても計測が行われるべきだというならば、その尺度を自

身で作らなければならない。しかしこの尺度は最高度に精神的なものであり、感覚によって見出されるものではない。円の場合でさえ、直径という尺度は円周には適用されないのである。そこで人間を機械的に測ろうとして、画家が頭部を尺度の単位にもっともすぐれた部分として利用するとしても、他の四肢にはきわめて小さな、そして表現しにくい分数なしでは、それを適用させることはできない。<sup>21</sup>

In jedem lebendigen Wesen sind das, was wir Teile nennen, dergestalt unzertrennlich vom Ganzen, daß sie nur in und mit demselben begriffen werden können, und es können weder die Teile zum Maß des Ganzen noch das Ganze zum Maß der Teile angewendet werden, und so nimmt, wie wir oben gesagt haben, ein eingeschränktes lebendiges Wesen teil an der Unendlichkeit oder vielmehr, es hat etwas Unendliches in sich, wenn wir nicht lieber sagen wollen, daß wir den Begriff der Existenz und der Vollkommenheit des eingeschränktesten lebendigen Wesens nicht ganz fassen können, und es also ebenso wie das ungeheure Ganze, in dem alle Existenzen begriffen sind, für unendlich erklären müssen.<sup>22</sup>

すべての生命体において我々が部分と呼ぶところのものは、全体においてのみ、そして全体と共にでなければ理解できないほどに全体と分かちがたい。全体の尺度に部分が、また部分の尺度に全体が適用されることはできないのである。そして先に述べたように、有限な生命体は無限なものへ関与し、あるいはむしろそれは何か無限なものを自らのうちにもつのである。もしも我々が、有限な生物の存在と完全性の概念を完全に理解することはできないということ、それゆえすべての存在が包括されている巨大な全体と同じく、無限に説明しなければならないということをお願いしないならば、そういうべきである。<sup>23</sup>

Der Dinge die wir gewahr werden, ist eine ungeheure Menge, die Verhältnisse derselben, die unsre Seele ergreifen kann, sind äußerst mannigfaltig. Seelen, die eine innre Kraft haben sich auszubreiten, fangen



an zu ordnen um sich die Erkenntnis zu erleichtern, fangen an zu fügen und zu verbinden um zum Genuß zu gelangen.

Wir müssen also alle Existenz und Vollkommenheit in unsre Seele dergestalt beschränken, daß sie unsrer Natur und unsrer Art zu denken und zu empfinden angemessen werden; dann sagen wir erst, daß wir eine Sache begreifen oder sie genießen.<sup>24</sup>

我々が認める事物はきわめて多数であり、我々の魂が捕捉しうる事物の関係は極度に多様である。伸長していく内なる力をもつ魂は、認識を容易にするために秩序付けをはじめ、享樂を得るためにつなぎ合わせたリ結合したりし始める。

したがって、我々は魂の中ですべての形態の存在や完全性を制限しなければならない。そうすることで、自分流に考えたり感じたりするためにふさわしいものとなるのである。その時に、我々は初めてある事柄を理解したり享受したりするといえるのである。<sup>25</sup>

Wird die Seele ein Verhältnis gleichsam im Keime gewahrt, dessen Harmonie, wenn sie ganz entwickelt wäre, sie nicht ganz auf einmal überschauen oder empfinden könnte, so nennen wir diesen Eindruck erhaben, und es ist der herrlichste, der einer menschlichen Seele zuteile werden kann.

Wenn wir ein Verhältnis erblicken, welches in seiner ganzen Entfaltung zu überschauen oder zu ergreifen das Maß unsrer Seele eben hinreicht, dann nennen wir den Eindruck groß.<sup>26</sup>

魂が、関係をいわばその調和の芽生えにおいて気づいたとしても、もしもこの調和が完全に展開された時には、魂は一挙に見渡したり感じたりはできないだろう。そこでこの印象を我々は崇高な印象と呼ぶ。これは人間の魂が経験できるもっとも素晴らしいものである。

その完全な展開において我々の魂の尺度が十分に見渡したり把握したりすることができる関係が認められる時、我々はその印象を大いなる印象と呼ぶ。<sup>27</sup>

Wir haben oben gesagt, daß alle lebendig existierende Dinge ihr Verhältnis in sich haben, den Eindruck also, den sie sowohl einzeln als in Verbindung mit andern auf uns machen, wenn er nur aus ihrem vollständigen Dasein entspringt, nennen wir wahr, und wenn dieses Dasein teils auf eine solche Weise beschränkt ist, daß wir es leicht fassen können, und in einem solchen Verhältnis zu unsrer Natur stehet, daß wir es gern ergreifen mögen, nennen wir den Gegenstand schön.<sup>28</sup>

すべて生きているものは、彼らの関係を自身のうちにもっているということを上に述べたが、そういうものが個々別々にでも、他のものと結合してでも、我々に与える印象がその完全な存在からつくられるものでさえあれば、この印象を真実の印象と呼ぶのである。そしてこの存在がいくら制限されて、我々に把握されやすくなっていて、そうした関係において我々の本性に適合し、我々も喜んで把握したいという時に、この対象を美しい対象と呼ぶ。<sup>29</sup>

Ein Gleiches geschieht, wenn sich Menschen nach ihrer Fähigkeit ein Ganzes, es sei so reich oder arm als es wolle, von dem Zusammenhange der Dinge gebildet und nunmehr den Kreis zugeschlossen haben. Sie werden dasjenige, was sie am bequemsten denken, worin sie einen Genuß finden können, für das Gewisseste und Sicherste halten, ja man wird meistens bemerken, daß sie andere, welche sich nicht so leicht beruhigen und mehr Verhältnisse göttlicher und menschlicher Dinge aufzusuchen und zu erkennen streben, mit einem zufriedenen Mitleid ansehen und bei jeder Gelegenheit bescheiden trotzig merken lassen, daß sie im Wahren eine Sicherheit gefunden, welche über allen Beweis und Verstand erhaben sei.<sup>30</sup>

同じことが起こるのは、人々がその能力にしたがって、それがどれほど豊かであるか貧弱であるかにはかかわらず、一個の全体を事物の相互関係から形成し、いまや円環を完結した時である。人々は、それがもっとも安易だと思い、そこで彼らが楽しみを見出せるところのものが、最

も確かなもの、最も安全なものであると思うだろう。さらにこうした人々は以下のことをたいてい認めるだろう。彼らが、容易に落ち着かず、多くの神的・人間的な事物のより多くの諸関係を探し出して知ろうと努め、満ち足りた同情の心をもって見つめ、それぞれの位置で多少反動的に、彼らが真実なものの中にあらゆる証明や悟性を超越する確信を見出した、ということ。<sup>31</sup>

Sie können nicht genug ihre innere beneidenswerte Ruhe und Freude rühmen und diese Glückseligkeit einem jeden als das letzte Ziel andeuten. Da sie aber weder klar zu entdecken imstande sind, auf welchem Weg sie zu dieser Überzeugung gelangen, noch was eigentlich der Grund derselbigen sei, sondern bloß von Gewißheit als Gewißheit sprechen, so bleibt auch dem Lehrbegierigen wenig Trost bei ihnen, indem er immer hören muß, das Gemüt müsse immer einfältiger und einfältiger werden, sich nur auf einen Punkt hinrichten, sich aller mannigfaltigen verwirrenden Verhältnisse entschlagen, und nur alsdann könne man aber auch um desto sicherer in einem Zustande sein Glück finden, der ein freiwilliges Geschenk und eine besondere Gabe Gottes sei.<sup>32</sup>

彼らは自分達の内心の羨ましい落ち着きと歓喜をいくら誇りに思っても足りなくて、この幸福こそ究極の目標であることを人々皆にほめかすのである。しかし、一方で彼らがそもそも如何なる道を通してこの確心に到達したか、また他方でその確信の根本が何であるかも明快に見出すことが出来ず、ただ確信を確心として語るばかりであるから、学習しようと躍起になっている人も、心情は次第に純一にならねばならず、単に一点にのみ心に向け、多様で混乱している状態から抜け出し、このようにしてのみ人はある状態の中にいよいよ確実に幸福を見出せるが、このことこそが神自らの贈り物と神が与えた特別な才能である、ということは何度も何度も繰り返し聞かなければならないが、それは少しの慰めにしかならない。<sup>33</sup>

Nun möchten wir zwar nach unsrer Art zu denken diese Beschränkung keine Gabe nennen, weil ein Mangel nicht als eine Gabe angesehen werden kann, wohl aber möchten wir es als eine Gnade der Natur ansehen, daß sie, da der Mensch nur meist zu unvollständigen Begriffen zu gelangen imstande ist, sie ihn doch mit einer solchen Zufriedenheit in seiner Enge versorgt hat.<sup>34</sup>

さて我々の考え方からすれば、不足しているものを才能と思うわけにはいかないから、この制限を才能と呼ぶつもりはなく、人間は大概どうせ不完全な理解しかできないので、自然が人間のその限られた範囲においてこのような満足を感じることができるのは、全く自然の恩恵なのだと考えたいものである。<sup>35</sup>

ハンブルク版ゲーテ全集の第8巻の注釈において、この随筆はスピノザの『エチカ』、そしてシャフツベリ伯爵とジョルダノ・ブルーノの思考回路に似ていると説明されている。

### 第3章 スピノザについての 第三の研究時期（1811年－1812年？） —ゲーテのスピノザに関しての発言— 『詩と真実』より

本章では、ゲーテのスピノザについての第三の研究時期（1811年－1812年？）の資料を紹介する。

『詩と真実』はゲーテの自伝の一部である。なぜ一部であるかという点、ゲーテは1749年から1832年まで生きていて82歳になった。しかしこの自伝はゲーテの幼年期と青年時代を描き、ゲーテの人生を1749年から1777年まで描写している。ゲーテは亡くなる一年前の1831年、第四部を完成した。一生涯

を描写する予定であったが、1814年に第三部を出版した後に他の作品『西東詩集』と『ファウスト第2部』に力を入れたので、『詩と真実』の中で一生涯を描くことができなかったのである。

ゲーテのスピノザに対する考えの多くは『詩と真実』の第三部第十四章と第十五章と第四部第十六章にある。第三部の第十五章ではゲーテの「プロメトイス」と汎神論論争とも呼ばれるスピノザ論争について描いている。本節では主に第三部第十四章と第四部第十六章からの引用文を紹介する。

本節の引用文の①から④までは『詩と真実』の第三部第十四章からである。第十四章ではゲーテが主に同時代の人々を紹介し、その中でフリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービとの友情についても述べている。ゲーテはヤコービによってスピノザの哲学を熟知した。第十四章の中にゲーテはスピノザの哲学から受けた影響とその印象も述べている。

① 第三部第十四章から（ここではスピノザの影響について述べている）

「これほど決定的に私に働きかけ、私の考え方の全体にあればほど大きな影響をあたえたこの人物は、スピノザであった。つまり私は自分の特異な本性を陶冶する手段をあらゆるところに探し求めて得られなかったその果てに、とうとうこの人の『エチカ』にめぐり合ったのである。」<sup>36</sup>

② 第三部第十四章から（ここではゲーテが『エチカ』から引用し、その感想について述べている。ゲーテは特にスピノザの完全な無私の精神に惹きつけられたようである。）

「この書物から私がなにを読み取ったか、この書物のなかにどのような意味をもちこんで読んだか、それについて説明することは私にはできない。要するに私は、本書に私の情熱が静められるのを感じたのである。私には感性的世界にも道徳的世界にも、大きな自由な眺望が開かれてゆくように思われた。しかし私をとくに彼にひきつけたものは、あらゆる文章から輝き出てくる完全な無私の精神だった。『神を真に愛する者は、

神も自分を愛してくれることを望んではならない』というあの驚くべき言葉は、その言葉の基礎である前提のいっさい、およびその言葉から生まれる帰結のいっさいとともに、私の思索のすべてを満たした。なにごとにおいても無私であること、なにより愛と友情においてもっとも無私であることは、私の最高の願望であり主義であり実践だったのであるから、『私があなを愛したからといって、あなたにはなんの関係もないわ』という、あの後年の大胆な言葉は、まぎれもなく私の心から語られたものだった。』<sup>37</sup>

- ③ 第三部第十四章から（ここでゲーテは自分とスピノザを比較し、スピノザの熱狂的な弟子になった理由について述べている）

「ところで、ここでも見過ごされてはならないのは、もっとも緊密な結合は元来正反対のものから生まれるということである。いっさいを調和させるスピノザの平静は、いっさいをつき動かす私の志向と対照的だった。彼の数学的方法は、私の詩的な考え方、表現方法の正反対だった。そして道徳的な問題にふさわしくないとされる、あの規則的な取扱い方法こそが、私を彼の熱狂的な弟子とし、徹底的な崇拜者としたのである。精神と心情、悟性と感性とが、必然的な親和力でお互いを求めあっていた。そしてそのような親和力によって、正反対の性質をもつ事物の結合が可能になったのである。」<sup>38</sup>

- ④ 第三部第十四章から（ここではゲーテがヤコービとの出会いについて述べている。ヤコービがゲーテの先輩として彼を導き啓発しようとしていた。ゲーテにとってはこのような純粋な精神の親和が新しい経験だったようである。）

「しかし私の心のなかでは、いっさいが最初の作用、反作用のうちに発酵し煮えたぎっていた。フリッツ・ヤコービは、私が混沌とした心の状態を打ち明けた最初の人だった。私と同じく、彼の本姓はもっとも奥

ふかいところで作用していたから、私の告白を心から受け入れてくれて、自分も胸のうちを明らかにして私に伝え、私を彼の志向のなかに導き入れようとした。彼もまた、言葉には言い表しようのない精神的欲求を感じて、この欲求を他人の助けを借りて癒そうとはせず、自分自身でこれをはぐくみ、明らかにしようとしていた。彼が自分の心境について私にうちあけた事柄を、私は理解できなかった。私が自分自身の心境をはかりかねていたのだから、それはなおさらのことであった。しかし哲学上の思索においても、またスピノザの考察においてさえもはるかに私をしのいでいた彼は、暗中模索していた私を導き啓発しようと努めた。これほどに純粋な精神の親和は私には新しい経験だったので、もっと胸襟を開いて語り合いたいという激しい願望が生じてきた。いちど別れて寝室へ退いたのち、夜おそくなって私はもういちど彼を訪れた。月光が広いラインの河面にゆらめいていた。そして私たちは窓辺にたたずみながら、これから開けゆくとする青年期に、こんこんといかにも豊かに湧き出る思索の広がり、われを忘れて互いにうちあけあったのである。」<sup>39</sup>

引用文⑤から⑬は『詩と真実』の第四部第十六章からである。この章ではスピノザに関しての記述が多い。スピノザの作品を読む度にゲートは安らかな透明な気持ちにひたったのである。そしてゲートは自身をスピノザと比較している。

- ⑤ 第四部第十六章から（ここでは、バイルの『批判的辞典』<sup>40</sup>に記された「スピノザ」の項について述べている。この項は対立的スピノザについて述べられており、ゲートは、不快と不信の念を呼び起こしたようである。彼は以前スピノザの哲学書を読んだ際、「心のなごむようなそよ風が、そこから流されてきたようだ」と述べている。）

長いあいだ私はスピノザのことを考えなかったが、たまたまある反論を手にしたことによって、また彼にひき寄せられたのであった。父の蔵

書のなかで一冊の小冊子<sup>41</sup>を目にしたが、その著者はあの独自の思想家を激しく罵倒し、しかもいっそう効果的に事を運ぶために、表題の反対側のページにスピノザの像をかかげて、その下に *Signum reprobationis in vultu gerens*、すなわち、彼はその顔に永劫の罰と錯乱の相をそなえているという銘を記していた。このことは、肖像画を見たかぎりではもちろん否定できなかった。というのは、その銅版画はみじめなほど出来の悪いものであり、また完全な戯画であったからである。それを見て私は、自分が憎んでいる人をまず歪曲し、ついでそれを怪物だといって攻撃するあの反対者たちのことを思い浮かべないわけにはいかなかった。

しかし私はこの小冊子からなんらの印象をも受けなかった。私はつねに、他人の口から、ある人がこう考えていたはずだという意見を聞くよりは、むしろ、直接その人から、その人がどのように考えているかを聞きたいと考えていたので、一般に私は論争というものを好まなかったからである。しかし私は好奇心のおもむくままに、ペイル<sup>42</sup>の辞典のスピノザの項を読んでみた。この辞典は無用な饒舌のために馬鹿げた有害な書物であると同時に、その博識と鋭い洞察によって貴重で有益な書物でもあるのである。

「スピノザ」の項は私のうちに不快と不信の念を呼び起こした。まず最初にこの人が無神論者であると記され、この人の意見がきわめて忌まわしいものであると述べられていた。ところがそれについて、この人が静かに思索し、自分の研究に専心する人、善良な市民、話ずきな人、温厚な私人であったことを認めている。しかしこれでは、「さらばその果によりて彼らを知るべし」<sup>43</sup>という福音書の言葉がすっかり忘れられているとしか思えなかった。——なぜなら、有害な教義から、人にも神にも好感をあたえる生活が生ずるはずはないからである。

私はかつてあの注目すべき人の遺著のページをめくったとき、なんともいえず安らかな透明な気持ちにひたされたことをまだよく覚えていた。細かい点まで思い出すことはできないにしても、この印象はまだ鮮やか



に私の心に残っていた。そこで私はまたあらためて、あのようにならされるところの多かった作品に急いで返って行った。そしてこのたびもまたまえと同じように、心のなごむようなそよ風がそこから流されてきた。私はこの読書に熱中し、自分自身を振り返ってみて、いままで世界をこれほど明快に見たことはいちどもなかったような気がした。<sup>44</sup>

- ⑥ 第四部第十六章から（ここでゲーテは「永遠なもの、必然なもの、法則的なものを確信している」ことについて述べている）

仕事、嗜好、趣味、道楽、あらゆるものをわれわれは試みしてみる。そしてあげくは、「いっさいが空である」という嘆声をもらすのである。この誤った、それどころか、神をないがしろにする箴言を耳にしても驚く者は一人もいない。むしろなにか賢明な否定しえないことを語ったような気になっている。ただ少数の人だけが、このような耐えがたい感傷を予感して、すべてを一つ一つ諦めることを避けるために、一挙にひとまとめにして断念するのである。

こういうひとびとは永遠なもの、必然なもの、法則的なものを確信している。そして不壊の観念を、すなわち、無常なものを目にしても廃棄されたとなく、むしろ確証されるような観念を築きあげようとつとめる。しかしこのような考え方にはたしかに超人間的なところがあるので、これらの人たちはえてして非人間、神と世界をないがしろにする人と考えられがちである。いや、それどころか、すべてが悪魔の角と爪の仕業のようにいいふらされる恐れさえないではないのである。<sup>45</sup>

- ⑦ 第四部第十六章から（ここでゲーテは、尊敬する神秘思想家たちがスピノザ主義のため弾劾された時、スピノザへの信念が更に増した、と述べている）

スピノザに対する私の信頼の念は、スピノザが私のうちに呼び起こした心の安らぐような印象にもとづいている。私の尊敬する神秘思想家た

ちが、スピノザ主義のゆえをもって弾劾されたときも、私の信頼の念は増すばかりであった。ライプニツさえこの非難をまぬかれることができなかつたと聞いたときも、またプールハーヴェが、同じ思想を抱いているという嫌疑を受けて、神学から医学に移らざるをえなかつたことを知ったときも、そのことに変わりはなかつた。<sup>46</sup>

- ⑧ 第四部第十六章から（ここでゲーテは、「スピノザの思想」を完全に理解することができない、と述べている。）

しかし私が、彼の著書に自分の名を記したいほどに思っているとか、文字どおりにそれを信奉しているなどは考えないでいただきたい。というのは、誰も他人を理解できるものではないということ、同じ言葉を聞いても誰も他人と同じことを考えるものではないということ、ひとつの会話、ひとつの読書でも、人がちがえばそれぞれにちがう考えを呼び起こすものであることなどを、私はすでにあまりにも明白に理解していたからである。『ヴェルター』と『ファウスト』の著者であり、このような誤解を骨身にしみて知っている私が、デカルトの弟子であり、数学とユダヤ神学の教義によって思想の頂点に達し、今日にいたるまであらゆる思弁的努力の目標とされているかにみえる人を、完全に理解することができるなどという自惚れさえ抱いてはいなかつたということを、読者はおそらく信じてくれるであろう。<sup>47</sup>

- ⑨ 第四部第十六章から（ここではゲーテが、「自然の働きと動物が人間に驚異の念をもたらず」ことについて述べている）

自然は永遠の、必然的な、神自身でさえなんら変更することのできない神的な法則に従って働いている。これについてはすべての人間が、意識することなく、完全に一致している。悟性を、理性を、いや、時には恣意のみ暗示しているかにみえる自然現象が、いかにわれわれに驚異の念を、いや、畏怖の念をもたらずかを考えてみるがよい。

動物のうちになにか理性に似たものが現われると、われわれは驚異の念から容易に立ち直ることができない。なぜなら、動物はわれわれのごく身近に立っているけれども、彼らは無限の深淵によってわれわれから分かれ、必然性の領域に追いやられているかに見えるからである。それゆえにわれわれは、動物たちのかぎりもなく精妙ではあるが、厳密に局限された技術を、あくまで機械的なものであると説明するあの思想家たちを悪く思うわけにはいかない。<sup>48</sup>

- ⑩ 第四部第十六章から（ここでゲートは、「植物の例を通してわれわれ自身の優越性の観念」について述べている）

植物に目を向けるとき、われわれの主張はいつそうみごとに証明される。人の手にふれられたねむり草が、繊毛の生えた葉を一對ずつたみ合わせ、ついには関節でも折り曲げるように、その葉柄を垂れるのを目にすると、われわれをとらえる感情に説明を加えてみるがよい。さらに、蝶形花が、目に見えるような外的な誘因もないのに、その葉を上げたり下げたりして、自らたわむれるようにも、われわれの観念をあざわらうようにも見える様子を観察するとき、この感情（私はこれに名前をあたえようとは思わない）はいちだんと高められる。その巨大な葉の傘を自分の力で交互に高く掲げたり沈めたりする能力をあたえられているかに見えるバナナ樹のことを思い浮かべてみるがよい。これを初めて目にすると人は、驚きのあまりあとずさりするであろう。われわれ自身の優越性の観念は、われわれのうちに深く根をおろしているのです。外界がこのような優越性をもつことを、われわれはけっして認めようとしません。それどころか、できさえすれば、外界の優越性に、それがわれわれのものと同様のものである場合でさえ、難癖をつけたがるのである。<sup>49</sup>

- ⑪ 第四部第十六章（ここでゲートは「人間の道徳律にそむいた非常識な行動」について述べている）

ところが、人間が一般に認められている道徳律にそむいた非常識な行動をし、自分の利益にも他人の利益にもならない訳のわからない振舞いに出るのを目にするときも、同じような驚きにわれわれは襲われる。そのときに感ずる恐怖の念をまぬがれるために、われわれはそれをただちに非難と嫌悪に変え、現実には、あるいは観念のなかで、そのような人間から逃れようとつとめる。<sup>50</sup>

- ⑫ 第四部第十六章から（ここでゲーテは「彼のうちにある詩的天分をまったく自然として考えるようになった」ということについて述べている）

スピノザがあのように力をこめて説いたこの対立を、しかし私は、まことに奇妙なことであるが、私自身のあり方にたいして適用してみた。そしてもともと私は、これから述べることをわかりやすくするのに役だてるためにのみ、上のようなことを述べたのであった。

私は私のうちにある詩的天分を、しだいにまったく自然として考えるようになっていた。私は外的な自然を私の詩的天分の対象として眺めるように生まれついていただけに、なおさらそうであったのである。このような詩的天分の発言は、もちろんなんらかの誘因によって呼び起こされ規定されることもあったが、もっとも喜ばしくもっとも豊かにそれが現われるのは、無意識のうちに、むしろ意思に反して現われてくる場合であった。<sup>51</sup>

- ⑬ 第四部第十六章から（ここでゲーテは「詩的天分の発信についての経験」について述べている）

野ゆけど、森ゆけど  
わが歌は、ひねもす  
わくがごと、唇にいず

夜、目を覚ますときにも同じようなことが起こった。しばしば私は、先人の一人<sup>52</sup>の例にならって革の胴着を作らせ、思いかけず胸に浮かん

できたものを、暗闇のなかでも手さぐりで書きとめる習慣をつけたいと思った。歌がおのずと口をついて出てきて、あとになってそれを書きとめておこうとしても、うまくいかないことがよくあった。そのため私は、立ち机にかけよって、ゆがんでいる紙を直す暇も惜しんで、身じろぎもせずに、その詩を始めから終わりまで、はすかいに書きおろすというようなことがなんかあった。同じ意味あいから私は、ペンよりはなめらかに字の書ける鉛筆を好んで用いた。というのは、ペンがきしんだりひっかかったりして、私を夢遊病者的な詩興から呼び覚まし、私の気を散らして、まさに生まれ出ようとしている小さな生き物の息をとめたことが、二、三度あったからである。私はこれらの詩にたいして、いわば、自分の孵化した雛鳥たちが可愛い鳴き声をたてて自分のまわりを歩いているのを見ている雌鶏のような気持ちを感じていたので、ある種の特別な畏敬の念を抱いていた。まえまえから私は、自分の詩を朗読によってだけ人に伝えたいという気持ちをもっていたが、この気持ちがかまた新たに私のうちに起こってきた。詩を金にかえるのは、私には嫌悪すべきことに思われた。<sup>53</sup>

## おわりに

本研究ノートでは、ゲーテがスピノザについて言及している資料を、できるだけ時間軸に沿って取り上げた。各章もゲーテが作品を執筆した順番で紹介した。

ゲーテの三つのスピノザ研究時期（1773年－1812年？）について紹介したが、序章で触れたようにゲーテは1773年以前に既にスピノザを研究していたことと、第三期はハンプルク版による1812年よりも長期にわたっていたことが考えられる。

エッカーマンは「ゲーテとの対話」の中で、ゲーテのスピノザについての

考えを次のようにまとめている。

キリストは、唯一の神を考え、その神に、自分自身の心の裡で完全なりと感じたすべての性質を付与したのである。神はキリスト自身の美しい心のものであり、キリスト自身のように善意と愛にみちあふれていた。それで善良な人たちが信頼の念を込めて彼に献身し、その教えを天国につうじる最も甘美な架橋としてうけ入れたのもきわめて自然なことであった。

しかしながら今、私たちが神とよんでいる偉大な存在は、たんに人間のなかだけではなく、豊かで力強い自然や、大きな世界的事件のなかにもあらわれるので、人間の性質に適応させて人間の手でつくられた概念では間に合わないのもまた当然である。それで、注意深い人ならすぐに不完全さと矛盾に突きあたってしまい、その場かぎりの口実で自分をごまかしている小人物か、あるいはより高い見識の立場に達するほどの大人物でないならば、懐疑に、いやそれどころ絶望に、陥ってしまうであろう。

ゲーテはこのような高い立場を、早くからスピノザの裡に見出していた。そしてこのすぐれた思想家の見識が自分の青年期の要求にきわめて適しているのを知って喜んだ。彼はスピノザのなかに自分自身を見出し、そうしてまた、スピノザによってこの上なくみごとに自己を確立することができたのである。<sup>54</sup>

この段落は「スピノザ研究」に書いてあるゲーテのスピノザのとらえ方をよく描写している。そしてエッカーマンは、ゲーテが『詩と真実』でも述べたようにスピノザの中に自分自身を見出したことを述べている。

ゲーテは「スピノザ研究」と『詩と真実』と書簡の中で、直接的にスピノザの哲学についての考えを述べたり、議論したりしている。また、本研究ノートで取り上げた詩「プロメートイス」と「神性」を通して、スピノザの哲学

を間接的に表現している。ゲーテの他の詩や作品（例えばプロメーテイスの断片など）でもスピノザの哲学，すなわち汎神論が表現されていると考えられるが，本研究ノートでは代表的な詩や作品を取り上げた。今後の課題としては他の未訳の資料，特に書簡を訳し，時間軸に沿ってまとめる。また，これまで収集した資料，今後収集予定である資料を詳しく解釈する。

#### 引用文献

(ドイツ語文献)

Friedrich Warnecke: *Goethe, Spinoza und Jacobi*. Hermann Böhlau Nachfolger, Weimar, 1908.

*Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften*. Hrsg. von Dorothea Kuhn. Band 13, Christian Wegner Verlag, Hamburg, 1955.

*Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche vom 23. Mai 1764 bis 30. Oktober 1775*. Hrsg. von Wilhelm Große. Band 1 (28), Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997.

*Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche vom 7. November 1775 bis 2. September 1786*. Hrsg. von Hartmut Reinhardt. Band 2 (29), Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997.

*Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche vom 10. Mai 1805 bis 6. Juni 1816*. Hrsg. von Rose Unterberger. Band 7 (34), Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1994, S. 44-45.

Johann Wolfgang Goethe: *Dichtung und Wahrheit*. Philipp Reclam, Stuttgart, 1993.

*Goethe Handbuch. Gedichte*. Hrsg. von Bernd Witte et al. Band 1, Verlag J.B. Metzler, Stuttgart, 1996. (参考文献)

(日本語文献)

ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 10』 詩と真実 河原忠彦訳・山崎章浦訳 潮出版社

ゲーテ (1981) 『ゲーテ全集 15』 書簡・他 小栗浩ほか訳 潮出版社

ゲーテ (1982) 『ゲーテ読本』 山下肇他著訳 潮出版社

ゲーテ (1951) 『ゲーテ詩集』 高橋健二訳 新潮文庫

ゲーテ (1940) 『ゲーテ全集 25』 松山武夫訳 改造社

エッカーマン (1968) 『ゲーテとの対話 (上)』 山下肇訳 岩波書店

エッカーマン (1968) 『ゲーテとの対話 (中)』 山下肇訳 岩波書店

森林太郎 (1924) 『鷗外全集 9』 ギョオテ伝・哲学 森鷗外全集刊行会

注

- 1 ゲーテ (1981) 『ゲーテ全集 15』 184 ページ。
- 2 エッカーマン (1968) 「ゲーテとの対話 (上)」 316 ページ。
- 3 ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 10』 詩と真実 178 - 179 ページ。
- 4 ゲーテのこと。
- 5 ピエール・バイル (1647 年 - 1706 年)。啓蒙主義の指導的哲学者。『歴史的批判的辞典』 (1695 年 - 97 年)。
- 6 森林太郎 (1924) 『鷗外全集 9』 599 ~ 560 ページ。
- 7 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 562.
- 8 筆者訳
- 9 *Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher Gespräche vom 23. Mai 1764 - 30. Oktober 1775.* S. 192.
- 10 Friedrich Warnecke: *Goethe, Spinoza und Jacobi.* S. 49.
- 11 ゲーテ (1951) 『ゲーテ詩集』 68 ~ 72 ページ。
- 12 ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 10』 詩と真実 192 ページ。
- 13 ゲーテ (1951) 『ゲーテ詩集』 121 ~ 125 ページ。
- 14 ゲーテ (1940) 『ゲーテ全集 25』 359 - 364 ページ。
- 15 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 7.
- 16 同上 S. 7
- 17 筆者訳
- 18 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 7.
- 19 筆者訳
- 20 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 7-8.
- 21 筆者訳
- 22 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 8.
- 23 筆者訳
- 24 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 8.
- 25 筆者訳
- 26 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 8.
- 27 筆者訳
- 28 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 9.
- 29 筆者訳
- 30 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 9.
- 31 筆者訳
- 32 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 9.
- 33 筆者訳
- 34 *Goethes Werke. Naturwissenschaftliche Schriften.* S. 9-10.



- 35 筆者訳
- 36 ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 10』 詩と真実 178 - 179 ページ。
- 37 同上 178 - 179 ページ
- 38 同上 179 ページ。
- 39 同上 179 - 180 ページ。
- 40 注 4 と同じ。
- 41 ヨハネス・コレールスの『スピノザの生涯』 1733 年。
- 42 注 4 と同じ。
- 43 マタイによる福音書, 第 7 章 20。
- 44 ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 10』 詩と真実 218 - 219 ページ。
- 45 同上 219 - 220 ページ。
- 46 同上 220 ページ。
- 47 同上 220 ページ。
- 48 同上 221 ページ
- 49 同上 221 ページ。
- 50 同上 222 ページ
- 51 同上 222 ページ。
- 52 フランチェスコ・ベトラルカ (1304 年 - 74 年)。
- 53 ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 10』 詩と真実 222 - 223 ページ。
- 54 エッカーマン (1968) 『ゲーテとの対話 (中)』 318 - 319 ページ。